

学校体育における“勝ち負け”のペダゴジカル レトリック

福田 潤*・依田匡弘**・芹澤康子***・木村昌彦****・佐野 裕****

About the Pedagogical Rhetoric of Victory and Defeat in Physical Education

Fukuda Jun, Yoda Masahiro, Serizawa Yasuko,
Kimura Masahiko and Sano Hitoshi

1. 問題の設定

学校教育には様々な競争の形態・契機が存在し、その“勝ち負け”の教育的意味をめぐるペダゴジカルレトリックも多様である。たとえば個人レベルの学力競争は過熱化する受験競争の中で学習意欲を高めるための教育的手段¹⁾から学力を序列化する手段²⁾へと転化し、学校間レベルにおいては進学率競争のバトルフィールドに組み込まれて喋々される変質を蒙る³⁾。さらにIEA (International Association for the Evaluation of Education Achievement) のTIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) やOECD (Organization for Economic Co-operation and Development) のPISA (Programme for International Student Assessment) などの国際的学力調査は、国家間の学力競争という文脈でその“勝ち負け”が読み解かれる歪曲も生ずるなど^{4) 5)}、教育における競争のペダゴジカルレトリックは重層的多元的に積み重ねられ、個人・集団・国家にクロスしてローカルとインターナショナルの視点からアプローチされるだけでなく教育の私事性と社会性・公共性の問題視角からも論議される⁶⁾。このように教育における“勝ち負け”のペダゴジカルレトリックは論者の教育観やイデオロギーとも関連し、その全体像を整理して俯瞰するのは容易でない。

中山文部科学相は、2004年のPISAの結果を受けて「今までの教育に欠けていたものがあるとすれば、競い合う心や、切磋琢磨する精神だ。学校時代は『競争は悪だ』といわんばかりの温室の中で育ち、実社会に出ると激しい競争社会が待っている。そのギャップに子どもたちは戸惑っている」⁷⁾と述べ、〈努力して自分を磨くことのすばらしさ〉や〈秀でることへの憧憬の念〉を教えるというレトリックの下に“競争の教育”を推進する意向を表明した⁸⁾。

しかし、教育における競争の是非はこうした“教育政策”だけが論議の対象となるのではない。教育における競争の存在そのものが、抽象的あるいは個別具体的に論議の対象となる。しかもその賛否は国民の間でも錯綜し、研究者や教師だけでなく児童生徒や保護者にもそれぞれに異なった見解があると見做さなければならない。そのうえ“勝ち負けの取り扱い方”や“教育的意味づけ”は、教える「教科」によって異なり、また「教材」によっても異なる。それではこうした次元の異なる多様な文脈のレトリックに架橋し、教育における競争の“勝ち負け”についての様々な言説を整理

*税務大学校 (横浜国立大学修士課程2年)、**天王台依田内科クリニック理事 (横浜国立大学修士課程2年)

中京女子大学健康スポーツ科学部、*横浜国立大学教育人間科学部

した先行研究はあるのか。管見するところそうした論議は皆無であり、教育における競争の“勝ち負け”を考察する有効なフレームを見出すことは容易でない。

ここでは次のような作業仮説に立って学校体育における“勝ち負け”の教育論を検討する。すなわち、教育における競争が財界などの要請する能力主義教育^{9) 10) 11)}にもとづく“競争の教育”であるかぎり、それはメリットクラシーに乗ることのできるエリート（勝ち組）を選別するための弱肉強食の教育という性格を帯びざるを得ない。しかしながら、教育における競争といっても学校体育における「競争型スポーツ教材」¹²⁾のように、教材そのものに競争という契機を内包する教科教育もある。こうした競争型スポーツ教材においては、競争を排除すると教材そのものの存在価値が消失する。

疑いもなく《競争のない競技スポーツ》とは一つの形容矛盾であり、学習内容に「競争型スポーツ教材」があるかぎり学校体育から競争の教育はなくなる。仮に「競争型スポーツ教材」を学校体育の学習内容から全面的に削除するということになれば、現実社会の人々の多くを魅了してやまない様々な競技スポーツの学習機会は縮小され、競技スポーツの楽しさやからだを動かす快感を味わうことに一定の間隙が生じることは避けられまい。スポーツの英語綴り（sport）を逆さ読みにしたトロプス論（t・r・o・p・s）^{13) 14)}などに見られる競争型スポーツ教材の教育的価値を貶低する主張は、スポーツ文化の一つである競技スポーツを批判的に継承発展させる視点を放棄するベクトルをもち^{15) 16)}、現実遊離の教科教育論、教材解釈論であると批判せざるを得ない。もちろん競争型スポーツ教材に“勝ち負け”が必須とはいえ、教育に必要な競争のあり方を誤ると〈体育嫌い〉や〈運動嫌い〉を生み出すだけでなく、競争型スポーツ教材のもつ他の文化的本質でもある“自己表現”や“自己認識”の教育的契機をも損なうことになるのは多言を要しない。

学校体育における競争のペダゴジカルレトリックは、その競争のモメントの教育的文脈における必然性と、結果としての“勝ち負け”を受容する個々の子どもたちの意識や判断という社会的精神風土を担った心的機制の在り様（認知心理的特性）とによって読み解かれる必要がある。したがって競争のモメントを内包する学校体育においても、それぞれの個別具体的な競争をどの様に位置づけるかが問われるのであり、教育行政のイデオロギーや授業者である教師個人々の授業観ともかかわって《なぜ競争させるのか》についてのアカウントビリティが求められると認識しなければならない。それでは、子どもの心身の健やかな成長発達を願い、社会的正義や自由・平等という人権感覚を育て、民主主義社会におけるシティズンシップ¹⁴⁾を培う上で、学校体育における競争の“勝ち負け”はどのように取り扱われるべきか。“教育における競争”の必要性が声高に主張されている今日、学校体育における競争の勝ち負けのペダゴジカルレトリックは改めて問い直される必要がある。

註

1. 市川伸一「学ぶ意欲の心理学」PHP新書、2001年。
2. 久富義之・高口明久「今日の学力競争の社会的土台」『教育』NO.557、国土社、pp.6-17。
3. 同上誌所収の千田正「青森県における進学率向上対策事業と学力競争の激化」（pp.26-35）佐々木英一「凝縮される学力競争—鹿児島からの報告」（pp.36-43）、千葉昌弘「高知の学力問題—公立中・高校への増幅と私学志向の早期化」（pp.44-51）などに詳しい。
4. 「学力トップ陥落の衝撃」（朝日新聞2004.12.8）、「比較・競争とは無縁—日本の反響に戸惑い」（朝日新聞2005.2.20）。

5. 『世界』NO. 739 (2005.5) 岩波書店所収の岩川直樹「誤読/誤用されるPISA」(pp. 121-128) および佐藤学「劣化する学校教育をどう改革するか」(pp. 110-120)など。
6. 小玉重夫「〈学び〉の社会性と〈教え〉の公共性」雑誌『教育』No. 575、国土社、pp. 110-117。
7. 朝日新聞、2004年12月18日
8. 『人づくりは国の根幹です』清和政策研究会刊、2002年
9. 佐貫浩「戦後社会構造の変化と教育の転換」『経済』NO. 114、新日本出版社、pp. 58-71。
10. 久富善之「“競争”の教育のゆくえ」『教育』NO. 650、国土社、pp. 6-14。
11. 小澤浩明「六・三・三制の再編と“階層化した競争”の誕生—1990年代以降の階層二極化と人間形成の課題」(中内敏夫・小野征夫編『人間形成論の視野』大月書店、2004、pp. 168-191)
12. 運動特性による教材の類型化の試みは1989年改訂の中学校学習指導要領にみられる。佐藤良男らは指導要領解説書『保健体育科の解説と実践』(小学館、1989年、26頁)において、“今回の改訂においては、スポーツやダンスの中の各種目の特性を「競争」「克服」「達成」「表現」のタイプでとらえる試みをし、それを学習指導に結びつけることができる……(中略)。その意味では、運動の実践場面において、これまで以上に「競争」や「協同」の経験を多く含んだ展開が期待される……”と述べている。こうした分類は「運動の機能的特性」などという用語使用に多少の新味はあるがその後も使用され、たとえば嘉戸脩は教材を競争型・克服型・表現型・それらの複合型とに分類し(宇上正彦編著『体育科教育法入門』大修館、昭和62年の「第4章体育の学習」53-75頁)、また杉山重利・園山和夫編『最新体育科教育法』(大修館、2002.5、pp. 23-24、p. 47)にも同様の分類がみられる。もちろん、こうした体育教材についての分類や概念規定に関する記述は、文部省刊の『学習指導要領』や『解説書』などには一切見られない。本稿で使用する「競技型スポーツ」という体育教材の分類は、あくまでも学習指導要領および同解説書の歴代作成協力者や教科書執筆者らによって一般に流布された官許の分類用語ともいえる。
13. 影山健・岡崎勝編「みんなでトロプス」風媒社、1984。同編著「スポーツからトロプスへ」風媒社、1988など。
14. 唐木国彦「人間にとってスポーツとはなにか」『唯物論』NO. 59、東京唯物論研究会、1985、pp. 45-55。
15. 田中新治郎「現代スポーツ思想の断面—所謂“トロプス”論の方法について」佐賀大学教養部研究紀要、第21巻、1989、pp. 55-71。
16. 平塚真樹「市民性(シティズンシップ)教育をめぐる政治」『教育』NO. 695、国土社、pp. 20-25。

II. 運動会の徒競争をめぐる

NHKはテレビ番組「クローズアップ現代」(1996年6月10日)で“競争のない運動会”をテーマに取り上げ、運動会のプログラムから徒競走が消えつつある風潮を報じたことがある。改めて述べるまでもなく運動会は各教科ならびに道徳、特別活動および学校行事等によって編成される教育課程の学校行事に位置づく体育的行事の一つであり、伝統的に地域密着型の行事として国民の関心も高い。したがって今日においても事柄の是非をめぐる賛否両論が錯綜し、“運動会・徒競走”というキーワードでインターネットを検索すると膨大な数がヒットする(2005年9月6日現在で約247,000件)。とはいえ、そこでの論議は運動会における徒競走に焦点化されず、広く教育における競争の“勝ち負け”についての教育論が様々な視点から展開されている。

1. 良くも悪くも思い出は徒競走

「運動会の種目と聞いて、一番最初におもいついたものは何ですか」という東京電力のホームページ『Tepore』のアンケート調査によると、有効回答者数2804人のうち1754人(約62.7%)が「徒

競走(リレー)」と回答し、障害物競争:3.8%、ムカデ競争:0.5%、二人三脚:1.7%、玉入れ:9.7%、フォークダンス:1.03%、組体操:1.1%、綱引き:8.3%、棒倒し:1.7%、騎馬戦:7.2%、その他1.3%であったという¹⁾。また『月刊べんてる』のメルマガアンケート「運動会の思い出は?」(N=522人)の調査では、徒競走(リレーも含む):31.2%、お弁当:27.8%、父親対抗レース:2.9%、玉入れ:6.7%、騎馬戦:15.1%、その他:16.3%という結果がホームページに公開されている²⁾。このように、「かけっこ」が得意であるか苦手であるかは別にして、大多数の人々にとって徒競走は運動会についての代表的な心象風景の一つとなっているように思われる。

2. 「かけっこ」の順位づけ

岡山県小学校教師の『教育のホームページ』のアンケート調査「徒競走の順位を決めることをどう思うか」では、徒競走で順位を決めても良い:84.9%、決めるのは良くない:9.3%、わからない:5.8%であったという(1997年10月31日現在)³⁾。

山本真実は“イー・ウーマン”のホームページ『サーベイリポートデータベース』において「子どもに優劣はつけないほうがいい?」というテーマで参加者の意見を求め、く子どもに優劣をつけて、小さい頃から競争させたり、それによって差がうまれるのはよくない、という考えがあります。学校教育では、数年前から運動会の徒競走などで順位をつけずに、全員一緒にゴールするようにした学校があります。また、公立学校では習熟度別クラスが始まり、六年生の子どもが三年生の子どもたちのクラスに入って勉強するような場面も出てくるようです。子ども達に優劣をつけるのはよくないことなのでしょうか? あるいは、それによって生じる問題はなんのでしょうか?と問いかけ、運動会の徒競走で順位をつけることに賛成:60%、反対:40%という意見分布を見たと報告している⁴⁾。山本はく競争しないことが平等?>という勝ち負けの順位づけに賛成する意見や、く「運動は苦手」がわたしのコンプレックスく劣等感を助長することもく評価のみでなく心のフォローまでが責任く優劣をつけられる側になってみてくださいくなどの疑問や反対意見も紹介するなかで、「かけっこ」の順位づけについて次のように述べている。

「平等を求めるあまりに、運動会での順位まで否定するという現在の学校教育は、やはり問題があるように思います。“優劣”の問題は、優劣をつけることが悪いのではなく、そのことをどう受け止めて、対応するか、という大人側の問題ではないかと思えます。(中略)親のほうが、子どもの“評価”を限定的に考えているからこそ、徒競走で走るコースにまで文句を言うというようなことがあるのでしょうか。」

「大切なことは、子ども自身の育ちにプラスになる方法で、多様な人間の存在や他人との違いを認知させ、子どもに“やる気”と“元気”をあたえ、将来の可能性の芽を育てていくことだということではないでしょうか。(中略)他人との“違い”をきちんと受け止める力のある子どもも、教師や大人側の対応によっては、“劣等感”“差”として心に傷を残してしまうのだということです。(中略)そして、最後にやはり運動会は運動会らしい形で残ってほしいなあと思うのです。」

こうした徒競走をめぐるインターネット上の論議には、運動会における競争のプログラムや勝ち負けの順位づけを肯定的に捉える意見が多数を占め、競い合っただけで順位をつけることには反対という意見を上回っているように見受けられる。それでは、当事者である今日の子どものたちは運動会についてどのような考えを持っているのであろうか。徒競走は好きなのであろうか、それとも嫌いな

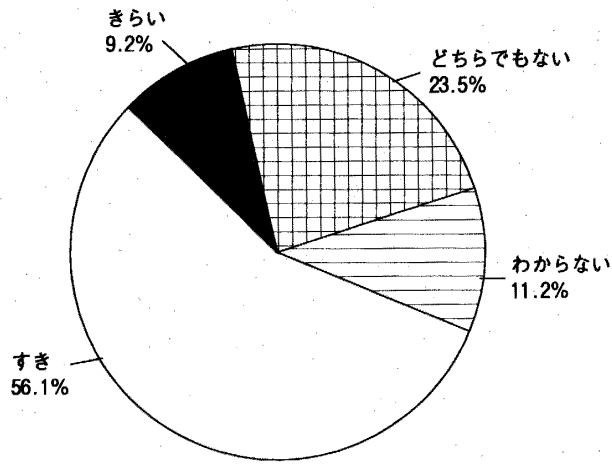
であろうか。

3. 「かけっこ」に醒めている子どもたち

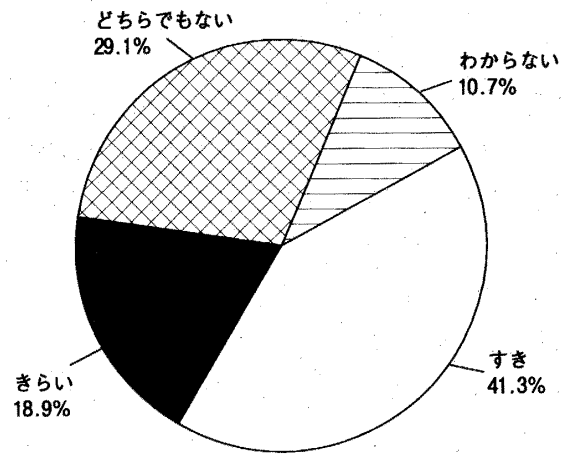
小学校5年生を対象に実施したわれわれのアンケート調査では、運動会の好き嫌いについて「好き」56.1%、「嫌い」9.2%、「どちらでもない」23.5%、「わからない」11.2%であり、“かけっこ”については「好き」41.3%、「嫌い」18.9%、「どちらでもない」29.1%、「わからない」10.7%であった。リレーについては「好き」44.9%、「嫌い」17.3%、「どちらでもない」25.0%、「わからない」12.8%という結果を得た。また、運動会で「もっとも楽しかったプログラム」はみんなで踊る『ソーラン節』などの集団演技(17.6%)という結果が示された。すなわち運動会の好き嫌いについていえば、約44%の子どもたちが運動会に背を向けていると読み取れる。また、徒競争(かけっこ)については58.7%の子どもたちが「嫌い」「どちらでもない」「わからない」と答え、“競い合うこと”に消極的であるという結果が示された(図Ⅱ-1~5参照、調査期日:2005.6~2005.9、調査対象:横浜市公立小学校AおよびB校5年生68名、大和市公立C小学校5年生30名、茅ヶ崎市公立D学校5年生35名、福岡市公立EおよびF小学校5年生62名、総数196名)。

先に引照した山本のイメージする運動会らしい運動会の形とはどのような形の運動会を指すのであろうか。運動会の競争のプログラムや勝ち負けの順序づけに賛成する立場と反対する立場とでは、こうした子どもの現実についての評価や対応は異なり、求める運動会のあり方や教育の方向づけも当然に異なってくる。たとえば、運動会の出自は海軍兵学校の「競闘遊戯会」(Athletic sport)にあり、運動会では軍事的色彩の残る集団訓練が行われているとして教条的に運動会を廃止すべきだとする主張も散見されるが、歴史に学ぶのであれば運動会は庶民が育てた村ぐるみ・町ぐるみの地域的文化行事の一つでもあった歴史的側面にも目を向ける必要がある^{5) 6) 7)}。

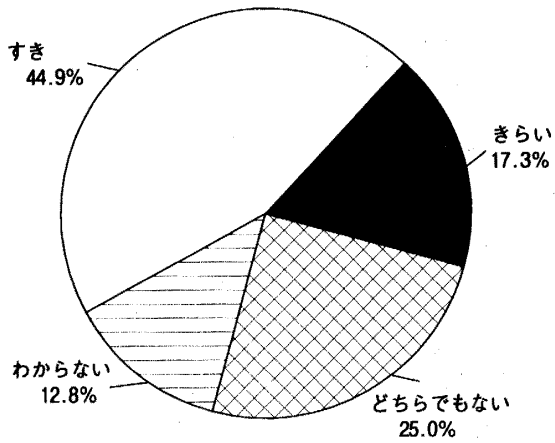
このように運動会のメタファーはペダンティックに様々に語られる。実証性のない過剰な読み込みと歴史的事実を綯い交ぜにした推論には論脈を辿るのに難しいレトリックもある。しかしながらそうした論議は術学者にゆだね、われわれは運動会の現実から出発して今後のあり方を探りたいものである。これからの運動会は、大人の心象風景として今なお残る伝統的な思い出の運動会を大切に継承しつつも“教育的意味”や“ねらい”を問い直し、そこに今日の子どもの求める新しい運動会の理念や方法を編み込んでいく必要があるだろう。われわれの調査は小規模でサンプル数も少なく対象も限定的で一般化するには慎重でなければならないが、仮に《「かけっこ」に醒めている子どもたち》が誤読でないとするれば、大多数の子どもたちがワクワクドキドキする運動会を改めて編み出し、地域の絆を深める祭りとしての運動会を再生させていかなければならないだろう⁸⁾。



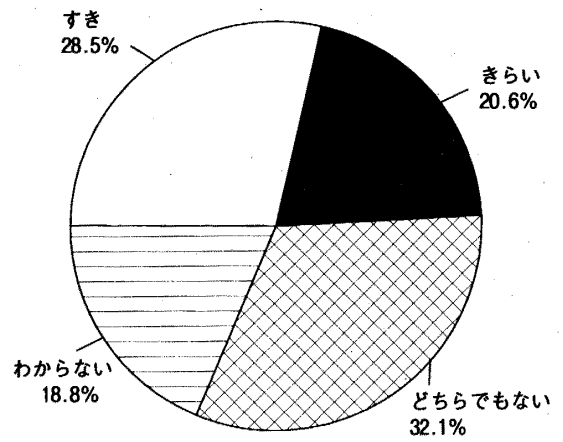
図Ⅱ-1 運動会は好き、きらい



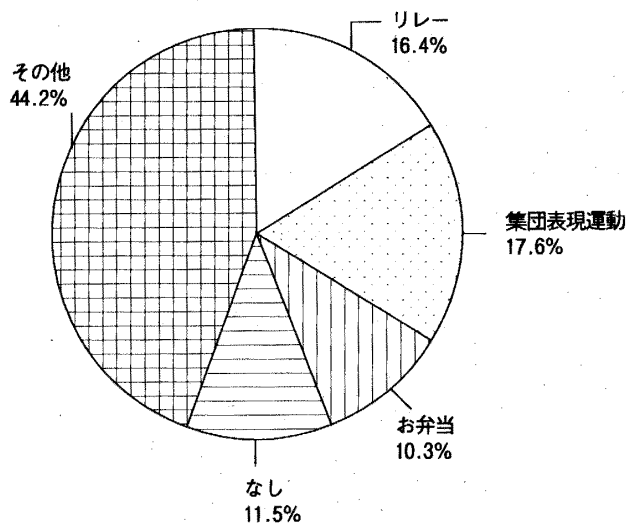
図Ⅱ-2 運動会のかけこは好き、きらい



図Ⅱ-3 運動会のリレーは好き、きらい



図Ⅱ-4 かけこで順位をつけることは好き、きらい



図Ⅱ-5 楽しかったことはなんですか

註

1. <http://www.tepore.com/koe/shu/030911/undoukai.htm>の集計結果（実施期間：2003.9.2～9.4、メール送信者数：5458人、回答者総数：2815人、有効回答者：2804人）。
2. <http://www.pentel.co.jp/pentel-town/monthly-pentel/2004>（2005/09/01）。
3. <http://www006.upp.so-net.ne.jp/ANMASA.HTM>「教育のホームページ」（1997.9.30～10.31）の集計結果（2005/8/28）。
4. <http://www.ewoman.co.jp>『サーベイリポートデータベース』（調査期間：2001/10/1～2001/10/5）掲載、山本真実（淑徳大学社会学部）「子ども優劣をつけないほうがいい？」
5. 荒井貞光「日本人とスポーツについての一考察—学校運動会の歴史と社会的意味—」『九州大学体育学研究』第4巻第4号、昭和46年、1-6頁。
6. 山本信良・今野敏彦『明治期学校行事の考察—近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社、1976、pp.360-399。
7. 『教育』NO.318、国土社所収の波多野総一郎「教師の仕事と学校行事」（pp.21-26）および村田直文「連帯を確かめ強めるために」（pp.27-31）など。
8. 子どもが主役の運動会や体育祭の運営方法、プログラムなどに関する出版物は数多い。しかしながら「階層化された競争」（前出、註1-9小澤浩明）の中で学ぶ楽しさを見失い、学ぶ意欲を萎えさせ運動会にも醒めている子どもたちを、序列化を通態とする今日の学校という競争秩序裡に再び呼び戻すことは難しい。「勝ち組み」と「負け組み」を生み出している弱肉強食の社会経済システムの変革を展望した取り組みこそが求められるが、力量不足のためにその具体的な道筋を描けないのが残念である。

III. 「競争心」と「競争」の教育論の一断面

仮説的モデル《「かけっこ」に醒めている子どもたち》とは、競い合うことに倦み、競争に嫌気がさしている子どもたちの謂いでもある。学校も含めて日常生活のあらゆる局面で常に競争圧力にさらされている子どもたちにとって、運動会は通常の授業空間とは異なる“ハレ”の行事というよりも、学校という競争秩序における日常的な順位づけの一つにすぎないと認識されているのではないだろうか。運動会の競争プログラムに「嫌い」「どちらでもない」「わからない」と答える子どもたちが多数となる理由の一端が、そこにあるように思われる。

久富義之は、“競争の教育”とは「競争の価値」（競争に勝つことが何より大事とする価値態度）が学校教育の全般を事実上おおってしまう教育のことであり¹⁾、こうした“競争の教育”はその帰結として競争参加者を相互に敵対化し、競争に勝つことがなによりも大事という「競争価値の肥大化」だけでなく公平で平等なルールにもとづく公正な競争の結果の勝ち負けは「正当」である、したがって順位づけや序列化は当然とする心理の普遍化をもたらすと論じている²⁾。しかもこうした競争秩序は、高学歴・有名大学をめぐるエリートへの「卓越化競争」（excellence criteria）とマージナルな底辺における「周縁化型競争」（no chance to distinction）とによって絶えず拡大強化され、ゆるぎのない正統性（legitimacy）を獲得して今日の日本社会全体を巻き込んでいく³⁾といえるだろう。小澤浩明は、このような競争秩序を支える学校での競争の性格を「階層化された競争」と捉え、子どもたち（中学生）の競争意識には文化階層による違いが見られるとして「努力主義イデオロギー」（競争を励みとして努力する価値態度）は高い文化階層に偏在し、低い文化階層には「生まれつきの能力によって結果が決まる」というイデオロギー（卓越化競争に“のらない”“のれない”“あきらめる”などの意識）が浸透しつつあると分析している⁴⁾。こうしてみると、“競争に参加する”“競争から降りる”の違いはあるが、どちらも競争に勝つことが何より大事とする価値意識

が判断の基軸となっていることがわかる。すなわち一方が「競争は勉強の励みになる」〈学歴に関係なく努力すれば誰でも世の中で成功できる〉など競争を肯定的に捉えており、他方は「才能に恵まれている人にはかなわない」⁵⁾として競争秩序から逃避する、あるいは競争秩序を否定し競争を拒否するという違いがあるだけである。

このように、競争の価値意識は今日の社会の支配的な価値意識として大人だけでなく広く子どもの「自我形成」や「競争心」のあり方にもつながる形で機能していることが理解される。深澤浩明は、こうした「競争的価値」に囚われた子どもたちの「競争心」の問題点を指摘する中で、幼いときから「できない」より「できる」ほうがよい、「遅い」よりも「速い」ほうがよいといった社会通念のなかに潜む「競争的価値」にさらされてきている子どもたちは、自分が「できない」ことや「遅い」ことに傷つきやすく、比較され負けて「序列」づけられることに敏感に反応し「自己否定感」を抱きやすく⁶⁾、自己効力感がもてなくなってきたと述べている。

それでは、教育における競争は否定され、排除されるべき存在であろうか。“競争の教育”の否定的現実を告発する久富善之も、「もっとも、競争はこの世にありふれているものであって、社会の諸側面に競争関係が存在することじしんは驚くに当たらない。また、競争はそれに参加する人間たちに独特の刺激をあたえ努力の集中を引き出す働きがあるので、競争を礼賛する者もあとをたたない。競争の働きが、努力集中だけであるならば、競争問題ははるかに単純だろう」⁷⁾と述べている。別言すれば教育におけるあらゆる競争のモメントを全否定し、教育における競争は《人間に優劣の順序づけをして子ども同士を敵対させ、競わせるシステムであり、子どもたちの健全な成長発達をスポイルする》とは単純に言い切れないということである。

教育には必要な競争もある。教育に競争は不可欠とする認識は、今日の“競争の教育”の推進論者に固有の問題意識というものではない。周知のように、旧ソビエト教育科学においては「競争」をコンクレンツィア（конкуренция：敵対的競争）とソレブノバーニエ（соревнование：非敵対的競争）に腑分けし、非敵対的な競争の教育を集団主義教育における重要な教育方法の一つに位置づけていた⁸⁾。その嚆矢は、レーニンが『競争をどう組織するか』において資本主義的競争に“конкуренция”の用語をあて、社会主義的競争に“соревнование”を用いたことに始まる（レーニン全集、26巻、邦訳415頁）。すなわち、この二つの性格の競争には「競争のモメント」や「競争の論理」において本質的な違いがあり、「ブルジョア的競争の原則は、一方に敗北と死、他の者に勝利と支配である。社会主義の原則は、全体として向上するために、先進的なものの立ちおくれたものに対する同士の援助である。ブルジョア的競争は、自己の支配をかためるために立ちおくれたものをうちのめせとっている。社会主義競争は、一人は立ちおくれ、他の一人はよく働き、さらに一人はりっぱに働く、そうした場合、いちばんよく働くものに追いつき、しかも全体として向上しようとするものである」⁹⁾とされていた。

教育における競争のあり方については、上述の社会経済構成体の違いから説き起こす旧ソビエトの教育科学にかぎらず、これまでも多くの教師や教育研究者によって共通の問題関心の一つとして論議されてきた。長瀬荘一によれば、競争には「構成的競争」と「破壊的競争」があるという¹⁰⁾。これらの用語や概念規定が当該専門分野でどれほどのオーソリティをもつかは別にして、「構成的競争」とは個人や組織において気持ちのよい生産的な競争が成立している場合であるが、「破壊的競争」とは行き過ぎた競争や人格評価に陥った競争であり害悪をもたらす競争であるとされる。そして、これら二つの競争の分岐点となるのは、まずもって指導者の意識と態度であって、親や教師が

その競争の意味やねらい、可能性と限界を心得ていれば、競争による否定的な結果は避けて通ることができる。ただし、それが成立するためには支持的雰囲気を満たした集団でなければならない、と説明されている¹¹⁾。こうしてみると教育における競争の性格は、そのモメントの階級的性格や社会的政治的文脈において異なり、文化階層の違いによって異なり、教師の教材解釈や指導方法によって異なり、“勝ち負け”に対する教師や親の対応によって異なり、社会的精神的風土の違いによって異なり、個々の子どもの競争心/心的機制の在り様によって異なるということであろう。

「競争の教育論の類型」

[競争の教育肯定論] (競争の教育の“全面的肯定論”と“条件付き肯定論”とがある)

競争観：国際的な競争秩序のなかで、社会を支える逞しい日本人の育成が求められている。

教育における競争刺激は能力を向上させ、自己認識の機会として大切である。

- レトリック
1. 人の能力差は素質や努力の差に加え生育における環境差やその他の結果の総体であって一人として同じでない。
得意・不得意があるのは当然であり、徒競走に勝ち負けをつけず平等にゴールさせるなどは欺瞞である。
 2. 競争刺激は向上心を鼓舞し、互いに切磋琢磨する教育機会として大切であり、互いの能力を向上させる。時にはこの分野では誰にも負けないとか、この分野では“びり”だという自己認識も必要であり、特に今日の競争社会においてはおとな社会への準備という意味でも競争の教育は必要である。
 3. フェア・プレイの倫理とグッドルーザーの精神を陶冶するうえで、勝ち負けの教育は不可欠である。

[競争の教育否定論]

競争観：「勝ち負け」の競争の教育は人間を順位づけ序列化する教育であり、優勝劣敗の弱肉強食の教育としてエリートコースに乗れない大多数の国民の人間性を疎外する。競争(competitive)の教育ではなく協同(collaborative)の教育こそ求められる。

- レトリック
1. 産業社会の中心価値である自由競争は“万人の万人に対する闘い”を本旨とする弱肉強食の競争原理であって歴史的には克服された哲学である。“共によりよく生きる社会”をめざす今日の教育理念にはなじまない。
 2. 子どもの能力を固定的に捉えてその一部を取り出して競争させ、序列化することは学問的にも教育論としても誤りである。序列化は子どもの自信を失わせる。
 3. 報償を鼻先にぶらさげ競わせないと能力を発揮しないと人間観は発想が貧しいうえに人間の尊厳を貶める。

[競争の教育からの逃避論]

競争観：人の能力は生まれつき決まっている。才能の恵まれている人にはかなわない。

- レトリック
1. 人には得手不得手がある。不得意なことを競っても無駄である。
 2. 嫌なことはやる必要がない。
 3. 負けるのはみっともないし、自尊心が傷つく。

それではこれまでの論考に照らして、次の新聞投書に見られる同一年代の主婦の教育観はどのように読み取られるべきであろうか。

《新聞投書A：主婦*****（埼玉県入間市38才）朝日新聞,2003.9.19》

2学期が始まってから、小4の長男は学校へ行きたがらない。というのは運動会の練習が苦痛なのだ。特にダンス。覚えられず、毎回「こら、違うぞ!」と叱られる。先生はいつも長男のそばで目を光らせる。余計緊張して訳がわからなくなる。悪循環そのものだ。「おれ、勉強もいやだけど、運動会の練習も、いい加減にしてほしいよ」私は返事に窮する。「頑張れ」とは言えない。だからと言って「じゃあ学校休めば?」とも言えない。長男を見ていると、学校生活も大変だなと思う。好きでもない勉強でいすに座らされ、踊りたくもないダンスを無理やりやらされる。大人なら「私、遠慮させていただきます」と断ることもできよう。そもそも何のための運動会なのだろう。保護者に見せるためでもないし、先生の実力を発揮する場所でもない。人には得手不得手があるのだから、皆が皆、上手に踊れなくてもいいのではないか。それよりも日々の学校生活が楽しめて、少年時代のいい思い出となるような運動会にしてほしい。

《新聞投書B：主婦*****（神奈川県37才）朝日新聞,2003.10.10》

「1ばんすきなのはかけっこです。ほんとうは1いか2いがよかったけど、6いになってしまいました。でも、とてもたのしかったです」小学2年の次男の作文である。彼はクラスで一番背が低い。運動会で各クラスの小さい子ばかり集めた徒競走でビリになってしまい、しかも第1グループで走ったため、全員が走り終わるまで最前列で「6」と描かれた旗を持つために。「大きい子と走ったなら6位でも仕方がないよ、と言えるけど、これではいかに遅いか立証されてしまったわね」と私は夫に言い、ため息をついた。しかし、当の本人は6位でも楽しんでいたので。そうだ、最下位の子はかわいそうなんて一体誰が決めたのだろう。かけっこのやり方については順位をつけるべきではないか。速い子と遅い子に分けて走らせる方が良いなど、いろいろ意見はあるようだが、子供たちはもっと単純に青空の下で、思いっきり駆けることを楽しんでいるのではないだろうか。来年は私も笑顔で「がんばったね」と声をかけてあげよう。

周知のように、政財界が主導する今日の“競争の教育”（能力主義競争）には“個性の尊重”や“能力に適した教育”が謳われ、世論の支持も小さくない。しかしながらそうしたキャッチコピーとは、「できる子」の能力はさらに伸ばし「できない子」には“そこそこの教育を”という「選別」と「切り捨て」のレトリックであるにすぎない。投書Aのように、はたして運動会は楽しければそれで良いのであろうか。「練習が苦痛だ」「人には得手不得手がある」「好きでもない勉強や踊りたくもないダンスを無理にやらされるのは耐えられない」という異議申し立てなどは、能力の微妙な差異化をめぐる今日の“競争の教育”においてはそれも個性とされ、“そこそこの教育を”という「周縁化型競争」のそのまた底辺をめぐる競争裡（no chance to distinction）へと際限なくシフトされていかざるをえないだろう。

初中等教育において学ぶべき共通教養とは何かがまずもって明らかにされねばならないが、ナショナルミニマムとしての共通教養がどのような内容であれ、学校では「練習は苦痛だ」という経験や「好きでもない勉強や運動」を避けて通ることはできない。とはいえ、このように述べたからといって、“学校とは大人の社会の文化を「強制力」をもって子どもたちに組織的に無理やり「暴力的」に教え込むところだ”¹¹⁾と主張する「プロ教師の会」の河上亮一の教育論を支持するものではない。

改めて述べるまでもなく、子どもは成長発達のふしぶしにおいて多くの学びの課題を担わなければならない。それは、人間として一人前になるために背負うべき当然の「重荷」であるともいえる。教師の提起する学びの課題に対峙し、学習仲間と共に支えあい学びあう過程をとおして子どもたち

は成長する。「練習は嫌だ」という子どもにも、発達課題としての「重荷」を背負う能力を身につけさせたいと願うのが学校という存在であり、教育の社会的使命でもある。差別的な競争秩序に組み込まれた今日の学校教育のあり方を告発することと、「嫌だ」「苦痛だ」という学習意欲の衰退を学校教育の責任に帰す議論とは峻別されなければならない。『楽しければそれでいい』と“そこそこの教育”を求めるのではなく、『来年は“がんばったね”と声をかけよう』という親としての対応こそが求められよう。子どもにとっての勝ち負けの意味づけは、親の競争に対する価値態度に影響を受けるところが少なくないからである。

註

1. 久富義之「競争の教育のゆくえ」『教育』NO.650、国土社、2000.3, pp.6-14
2. 久富義之「今日の学力競争の社会的土台」『教育』NO.557、国土社、1993.1, pp.6-17
3. 同時に久富は7年後の論文(前出1)において、このような「競争秩序の完成態はしかし、すでに一つの空洞化・形骸化をはっきりと見せてもいる」と、そのシステムのゆるみの予兆を指摘している。
4. 小澤浩明「六・三・三制の再編と“階層化した競争”の誕生—1990年代以降の階層二極化と人間形成の課題」(中内敏夫・小野征夫編『人間形成論の視野』大月書店所収、2004、pp.168-191)
5. 小澤浩明、同上書、p.180
6. 深澤広明「評価活動による“競争心”の組み替え」『現代教育科学』NO.586、2005.7, pp.14-16
7. 久富義之、前出(2)7頁。
8. ソビエト教育科学アカデミー版、ソビエト教育学研究会編訳『ソビエト教育科学辞典』明治図書、1963、pp.359-361
9. 杉山明男「集団主義と競争について」『ソビエト教育学』NO.2、明治図書、1962.4, pp.97-104
より転引用(原典は「社会主義競争とレーニン、スターリン」南信四郎『ソビエト国家論』三一書房、1950、pp.98-99)。
また、同論文は「生徒の社会主義的競争は、進んだものの経験を均等化し、おくれた者を援助し、全集団の一般的な向上を達成するという方法で、生徒の学習と労働の創造力を発達させ、積極性を高めていく過程である」というH. Aカイロフの定義も紹介している。
10. 長瀬荘一「教育における構成的競争の心理」『現代教育科学』NO.586、明治図書、2005、pp.17-19.
11. 河上亮一『学校崩壊』草思社、1999.2

IV. 体育科教育における「勝ち負け」の教材論

1. トロプス論の「勝ち負け」の教材論

〈競争のスポーツではなく協同のスポーツを〉と主張する影山らは、「競争のスポーツ」は敗者を生み差別的状況をつくるとしてスポーツの「競争原理」を否定し、勝敗のないゲーム“トロプス”を提案している¹⁾。トロプス論の問題意識は、競技スポーツにかぎらず体育育科教育における「競争型スポーツ教材」の評価においても同様であり、勝ち負けのともなう“競争の教育”は“弱者の論理”を欠いた優勝劣敗の弱肉強食の思想にもとづく教育であると批判する²⁾。たとえばトロプス論は、競争型教材の典型である「かけっこ」(徒競走)について、『競走ぎらいの子どもたちのもつともな理由』として次の三つを例示する。

第一に、(負けるのは)みんなの前でみっともない。

第二に、がんばっても、走るのが速くなるということはない。

第三に、(遅い子)は速い子の引き立て役になっているだけである。

また、運動会で実施される競走には「語られない四つの特徴」があると指摘する。

第一に、敗者であることをみんなの前で自覚させる。これは劣等感や自己否定感しか生み出さない。教師は「がんばることが大事だ」というが、子どもたちは「やればできることもあるし、やってもできないことがある」と反駁する。教師は、敗者に自尊心があることを忘れ、平気で「努力が足りない」と決めつけやすい。

第二に、教師は「がんばるプロセスが大事だ」というが、「がんばってもビリなら、最初からがんばらないほうがよかった」と口惜しがる子どももいる。教師は「がんばったからビリでもいいじゃないの」とか、「次にがんばればいいよ」などと励ましや慰みの言葉をかけるが、子どもたちはそうした言葉のリアリティのなさ、むなしさを知っている。

第三に、体育やスポーツなどでは、勝者と敗者が必ず分断され色分けされる。人生にも勝ち組と負け組が生じるが、“人生は競争である”というメタファーとしてスポーツは教材化されている。

第四に、学校行事である運動会の競走プログラムは強制動員型の全員参加が建前であり、「参加する、しない」の選択権のないのが一般的である。走るのが遅い子にとっては苦痛である。

上に参照する運動会の徒競走を素材に展開されたトロプス論には、次のような“競争のスポーツ批判”の哲学を読み取ることができる。すなわち、近代スポーツは本質的に産業社会の自由競争の論理にもとづき成立しており、競技スポーツは現実社会の優勝劣敗思想のメタファーとしての象徴機能をもつ。たとえば勝利をめざすスポーツ競技には必ず勝者と敗者がつくりだされるが、スポーツ倫理はなぜ敗者に“グッドルーザー”であることを求めるのか。これは、現実社会の人生の“勝ち組”である支配階級が、社会の競争秩序を安定的に維持するために“人生の敗北者”に求める暗黙の価値態度にほかならず、本質的に極めて欺瞞的なメタファーである、という思想である。

たしかに“競争”に積極的な価値を付与する今日の時代風潮のなかで、〈勝ち組〉のみが称揚され競技スポーツにおける優勝劣敗の意味づけからは〈弱者の論理〉が剥落し、これまでのスポーツ教育の存在意義を支えてきた“グッドルーザー”という教育的言辞のリアリティは著しく色褪せつつある³⁾。とはいえ、このような“スポーツの記号論”はトロプス論に特徴的な理論的アプローチということではない。たとえば「スポーツの流行は、人生とは競争であるという社会意識によって生まれ、またこの社会意識を強化するために組織された一種の陰謀なのだ。現代社会の競争原理も身体というもっともフィジカルな場面で構造化したとき、スポーツは民衆支配の政策として利用されるに至る⁴⁾と論ずる評論家もいれば、トロプス論と同じくスポーツの象徴機能という視点から「資本主義のモデルとしてのスポーツ」を読み解く哲学者⁵⁾もいる。

スポーツを記号論的にどのように読み解くかは論者の思想的立場や問題意識によって自由であるが、トロプス論のように競技スポーツを含む近代スポーツの歴史的進歩的側面を見ない議論は“産湯を流して赤子を流す”類の現代スポーツ論であり、唐木国彦の批判するパロディとしてのアンチ・スポーツ論⁶⁾以外のなにものでもない。たしかにトロプス論は、〈競走が好きの子がいてもかまわない〉が〈競走をしない権利〉も認めるべきだと主張しているにすぎず、“競走を禁止する”ファシ

ズムでもなければ“手をつなげばなかよしになれる”という安易さの提唱でもない論じる⁷⁾。しかしながらその主観的意図は別にして、そこには競技スポーツの歴史的文化的意義やスポーツ技術の進歩に寄与した積極的側面への問題関心が欠落し、スポーツ文化を批判的に継承し発展させるという視点を見出すことはできない。

われわれは、体育の学力の一つに“勝ち負け”の競技スポーツも含めてスポーツ文化の現状を批判的に読み解くスポーツリテラシーの能力を位置づける。こうした学力は、スポーツ産業の単なる受動的な消費者にとどまらないスポーツの権利主体としての国民を育成するうえで不可欠である。体育科教育の内容や目的^{8) 9)}、学力評価¹⁰⁾についてはこれまでも数多くの研究が積み重ねられてきており、ここではわれわれの考える体育の学力のアウトラインを示すにとどめる。

体育科教育の内容と学力

からだの教育：体力と運動能力

－「生きる力」の身体的基礎をつくる力－

運動の教育：運動技能の習熟と技術認識

－身体運動に親しむ・わかる・できる力－

スポーツ文化の主体者形成教育：スポーツ文化の享受・リテラシー

－見る・行う／参加する・変革する力－

2. 体育における“勝ち負け”の教材論

教育に必要な“競争の教育”とはなにか。教育に必要な競争はこれまでの論考に明らかなように、「競争のモメントの教育的必然性」「教師の教材解釈や指導のあり方」「子どもたちの競争心や勝ち負けの受容特性」および「親の競争に対する価値意識」や「社会的精神的風土」などの関数関係において成立する。たとえば人間的な価値の追求が教師の教材解釈や競争の教育にどれほど貫徹されていようとも、“勝ち負け”についての親の対応によっては結果として子どもに否定的な影を落とすこともある。こうした競争の教育にかかわる要因間の関連についてはデータ不足もあり実証的に検証できなかったが、多様な文脈のレトリックに架橋する議論の枠組みは整理できたと考える。

ところで、「なにを教えるか」「どのように教えるか」は教師の専門性にかかわる重要な教材論のテーマであるが、そのためには教師の教育課程編成権や教材の選択権が確保されなければならない。“あてがいぶち”の教材を「どのように教えるか」に限定された専門性では教育における“競争”のもつ今日の問題性を自覚することは難しいだろう。以下に、走運動は走・跳・投として象徴的に語られる子どもたちの基本的運動として重要であるとする視点から、小学校の「走運動」（短距離走とリレー）を素材に“勝ち負け”の教材論を検討する。

「競争のモメントの教育的必然性」

体育の学習内容の一つである「競争型スポーツ教材」は数学や国語その他の教科学習と異なり、スポーツ技術の習得と習熟過程で技能や戦術を競い合うことを学習内容とする。他教科の教材や学力テストの点数に競い合う教育的必然性はないが、体育科教育には教材そのものに競い合うモメントが学習内容として含まれる。「走運動」の教材はその典型的な一例である。しかしながら競争の教育的必然性とはこうしたディメンジョンのモメントだけでなく、その教育的文脈における

競争の必然性が問われなければならない。すなわち、体育学習単元のどの段階で競争させ、どのような競争の方法・形式—たとえば自分との競争（記録の向上）なのか他者との競争か、記録で競うのかスタートラインに並んで競うのかなどが教育条理にしたがって主体的に選び取られ、授業計画がデザインされなければならない。

[教材解釈と指導のあり方]

教科教育（体育）の研究者である細江文利は、授業で学生たちに「リレーのおもしろさはどこにあるのだろう」と聞くことにしているという¹¹⁾。学生は「抜いたり、抜かれたりするのおもしろい」と必ず答えるが、こうした学生の教材解釈は「リレーのおもしろさを観戦する側から捉えているのであり」「子ども（学習者）の立場からの捉え方ではない」と批判する。なぜなら「抜かれた子どもは、決してリレーをおもしろいとは感じないであろう」からと言う。だが、はたしてそうであろうか。むしろ細江の批判する学生の解釈にこそ“リレー教材”の本質がある。

細江自身も別の個所で、「リレーの楽しさや喜びは『競争に勝つ』という課題達成にあり、競争に勝つこと・競争すること自体の楽しさや喜びを知り味わうところに教育としての重要な意味がある」¹²⁾と述べている。このように、“抜いたり、抜かれたり”して勝ち負けを競い合うことがリレーである。

また、細江は「競争したり記録に挑戦したりして楽しむ走運動では、現在身につけている力の差が、そのまま優劣の差として外に現れてしまい」¹³⁾問題であるという。

たしかにトロプス論も主張するように、「がんばっても、走るのが速くなることはない」のは一面の真理である。だが、加藤謙一が「児童期の疾走能力の発達特性」について〈疾走速度は男女とも経年的に増大し、4年生から6年生にかけての増大が顕著〉であり、〈高学年になると男子では身長伸びと疾走能力が向上するが、女子では体重の増加につれて疾走能力が低下する傾向がある〉〈疾走能力の発達を縦断的にみると、男子は1年で疾走能力の高い児童はその後各学年で高く、1年生で疾走能力の低い児童はいずれの学年でも低い傾向であったが、女子では疾走能力の順位に変動がみられる。すなわち、1年生で疾走能力が高い児童が必ずしもその後ずっと高いとはいえず、1年生で疾走能力の低い児童が児童後期においても低いとはかぎらなかった〉¹⁴⁾と述べるように、子どもたちの走運動の能力差とはその時点での優劣であって固定的な能力差ではない。疾走能力の発達は男女において異なり、身体的成熟の個人差によっても異なるということである。このことは、疾走能力の能力差に焦点化した教材解釈ではなく、競い合うことで子どもたちがその時点でもつ自己の能力を最大限に発揮し、走る喜びを満喫する授業デザインが望ましいことを示唆する。

それは優劣を競うことを否定するのではなく、人間的価値におけるスポーツの勝敗の相対化を目指す“勝ち負けの教育”に焦点化されるべきであろう。なぜなら勝利に絶対的な価値をおく勝利至上主義の競争の教育は勝ったときには自己効力感をもたらすが、それは敗れると簡単に崩壊する有能感にすぎず、敗れたときは自己を哀れむ“犠牲者意識”のみを植え付けるだけだからである。

障害を背負って懸命に生きる子どもを追ったNHKドキュメンタリー番組『きらっといきる』（2005年9月24日、23時放送）において、「からだも普通の人とは違っているが、ボクはぼくだから」と語る主人公山崎泰広氏の表情には自己を哀れむ犠牲者意識などは微塵も感じられなかった。

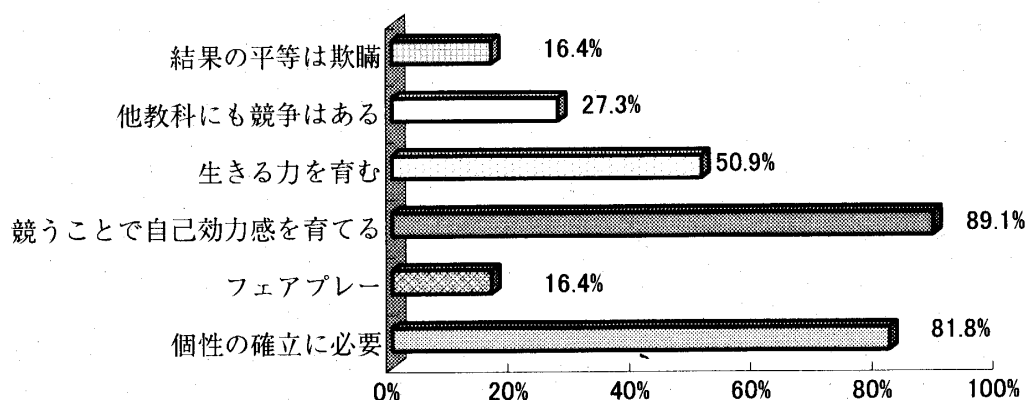
「ボクはボクだから」と野球や様々な事柄に積極的に挑戦し、明るく生きる主人公の自己意識・人格意識・人間的価値意識とは、一体どのようにして生まれたのであろうか。

人は他者を鏡として自己を認識するが、それは他者との様々な交流・かかわりあいをとおして集団性や社会性を獲得し、モノ・コト・ヒトとの関係能力を獲得する中でより鮮明な自画像を結ぶ¹⁵⁾。先に引照した競争の教育を批判する久富も「競争はそれに参加する人間たちに独特の刺激をあたえ努力の集中を引き出す働きがある」と述べているが、競争のモメントを内包する体育の教材解釈は“勝ち負け”の教育にいたずらに及び腰になるのではなく教育における競争のもつ肯定的側面を積極的に生かし、“ボクはぼくだから”という自己意識・人間的価値意識を培う競争のあり方を探らなければならない。それは、“競争の教育”のもつ否定的な側面に自覚的な教師によってはじめて可能となるように思われる。

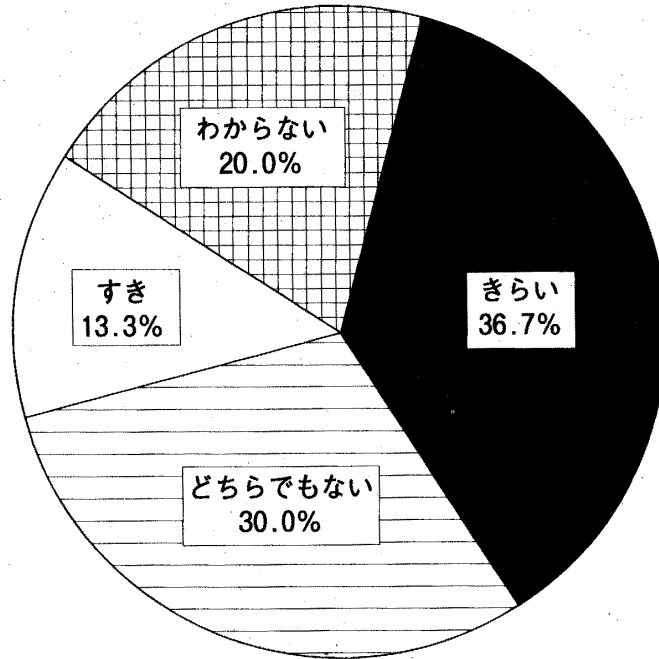
図IV-1に示すのは、NHKテレビ番組「競争のない運動会」を紹介し、広く体育における勝ち負けの競争の是非を横浜国大教育人間科学部「初等体育科教育法」の受講生（55名）に聞いた結果である。競争のプログラムに対する否定的意見は55名中1名であった。徒競走を素材に学校体育における競争の教材全般についての意見を求めたのであったが、分類項目にも明らかなように肯定的意見の多くはこれまでに流布されたレトリックの枠組みを越えるものではなかった。学生の意見とは対照的に、小学生に聞いた「体育の授業でかけこのタイムをはかることは好きですか、嫌いですか」の調査では「好き」（13.3%）、「嫌い」（36.7%）、「どちらでもない」（30.0%）、「わからない」（20.8%）というように、約87%の子どもたちが“勝ち負け”の競争に消極的・否定的な態度が示された（図IV-2）。

将来は教職に就くであろう学生と、今日の子どもたちとの競争の教育についてのこのような認識の落差は、どのように埋めていけばよいのであろうか。競争の教育の否定的な側面にイノセントな未来の小学校教師に、“勝ち負けに傷つきやすい”今日の子どもたちに必要な《勝ち負けの教育》とはなにかの問題意識を育てることが求められているといえないだろうか。

N = 54/55 名の肯定的意見（複数回答）



図IV-1. 小学校教員養成課程学生の意見分布
(調査日時2005.6.18)



図IV-2 体育の授業で「かけっこのタイムをはかること」は好き、嫌い
大和市公立C小学校 5年生30名 (2005.6調査)

註

1. 影山健・岡崎勝 (前出註I-13)
2. 岡崎勝、「競走嫌い」の権利『子どもの文化』2001年10月号
3. アテネオリンピックのハンマー投げで室伏浩二選手は金メダルに繰り上がった。室伏選手はメダルの裏側に刻印された古代ギリシャの詩人ピンダロスの詩を訳出し、「メダルの色はいろいろあるが、大事なのはそこに向かって努力すること。自分も金メダルを望んでいたが、それよりも大事なものはたくさんある・・・」と語り多くの人々の共感を呼んだ。室伏選手は「真実の母オリンピアよ あなたの子供達が競技で勝利を勝ちえた時 永遠の栄誉(黄金)をあたえよ それを証明できるのは真実の母オリンピア」と訳出したが、正しくは「黄金の冠を授けられし競技の母 オリンピアよ 真実の女王よ」であるという。いずれにしてもこのピンダロスの祝勝歌には室伏選手が解釈したような「勝利よりも大事なものがある」という意味は全くなく、むしろ「勝利こそが唯一絶対の価値である」ことが謳われている。古代ギリシャを「アゴン文化」と命名したのはスイスの歴史家ブルクハルトであるが、「勝冠競技」における勝利は神々の加護によるものとされ(宮崎亮「冠の効用—優勝をもたらすもの」(桜井万里子・橋場弦編『古代オリンピック』岩波新書、2004.7、pp.144-160)、優勝者の栄光である「キュドス」(誉れ)に特別な価値が付与されていたのである(岸野雄三「スポーツ史の教訓—古代ギリシャの場合」『体育の科学』1976.1 pp.6-9)。

セントポール寺院のペンシルバニア大僧正の言葉をクーベルタンが援用して後に広く人口に膾炙した『オリンピック大会で大切なことは勝つことではなく参加することに意義がある』という近代オリンピックのモットーも、古代ギリシャの競技者にとっては空虚な言葉の一つにしかならないであろうことは想像に難くない。とはいえ、近代オリンピックをめぐる様々な言説が史実や語源に忠実でなくてもなら問題ではない。なぜならオリンピック精神とはわれわれがスポーツに求めるあるべき理想像の投影であり、それが新たな神話と伝説をつくりだすゲネシスでもあるからだ。その意味では室伏選手のピンダロスの解釈も今日的には意義のある誤読であったといえるかもしれない。女子レスリングでは中京女子大学の吉田沙保里(55キロ級)と伊調馨(63キロ)が金メダル、同大学の伊調千春(48キロ級)が銀メダル、浜口京子(72キ

口級)が銅メダルを獲得したことは記憶に新しいが、はたして室伏選手の“勝利よりも大事なものがある”との発言はオリンピック精神を鼓舞し、反対に“金メダルでなければほしくない”と勝敗にこだわった伊調選手はグッドルーザーの精神に倅ると批判できるであろうか。いずれもが競技スポーツにおけるスポーツマン精神の表れであることに異論はないだろう。仮に室伏選手が予選落ちして先の発言をしたとするならば、それは犬の遠吠えほどのインパクトも与えなかったであろうし、また有森裕子選手が仮にマラソン最下位で“自分を褒めてやりたい”などと発言したら、世論の袋叩きにあっていたことは疑いえない。その意味で勝者は常に特権的な扱いを受けているといえるだろう。

4. 斎藤次郎「スポーツ嫌いのスポーツ論」大修館, 1985. 10月増刊号, pp. 17-19
5. 多木浩二「資本主義のモデルとしてのスポーツ」『現代思想』青土社, 1986. 5, vol. 14・5
6. 唐木国彦 (前出 I-14)
7. 岡崎勝 (前出 IV-2)
8. 内海和雄『体育科の学力と目標』青木書店, 1984
9. 出原泰明『異質協同の学び—体育からの発信』創文企画, 2004
10. 芹澤康子, 体育における「関心・意欲・態度」の評価に関する研究, (横浜国立大学教育学修士論文1993)
11. 細江文利「走運動の発達の特性と走運動の内容の扱い」『体育科教育別冊—走運動の授業』大修館, 1991. 5, pp. 8-15
12. 同上, p. 11
13. 同上, p. 8
14. 加藤謙一、同上書所収p. 29
15. 梅田正巳は次のように述べている。すなわち「何よりも発達途上の生徒たちには、他者と正面から向き合い、かかわりあい、時にはぶつかりあう場がどうしても必要なのです。他者とのかかわりあい方も、協同・協力の仕方も、事実と論理によって主張の正しさを争うことも、創造的なアイデアを競い合うことも、実際にそうした場を通してしか身につけることができないからです。つまり、「市民的徳性」は、そうした場を通してしか、獲得することはできないからです」(『「市民の時代」の教育を求めて—「市民的教養」と「市民的徳性」の教育論』高文研, 2001, pp. 171)